

# 子どもは何故遊ぶのか、 遊ばなければならないのか



一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 安家 周一

子どもたちの遊びを見ていると、幸せそうだな～と思う時や不思議だな～と思う時が何度もあります。女の子はママごとやお店屋さんごっこを好む傾向があり、ママごとなどでも、最近主役はお母さんよりペットのほうに人気があるなど、喜ばない変化もあるようです。男の子によくある遊びは「戦いごっこ」です。特にテレビやYouTubeなどのメディアで、のべつ幕なし無料で配信される様々な番組を見ている男の子は、「戦いごっこ」が大好きです。小生の満3歳の男の孫もご多分に漏れずラップの芯をもっては、「ジイジけんかしよう。チョスツ・バシ!!」と襲い掛かります。私が切れ役でバチバチ叩かれ二人して遊んでいると、このまま放置していいんだらうかと母親は心配顔です。子ども同士が体をぶつけあって遊んでいる様子を見ると野蛮そうなので、思わず「やめなさい!」と制止したくなるのではないのでしょうか。

一方、動物園の猿、実験用のラット、昔、我が家で生まれた子犬たちも、くんずほぐれつじゃれあい、取っ組み合い、かみ合いを繰り返しています。決してYouTubeを見ている訳ではないのにです。ラットの研究では、よく仲間とじゃれて遊んだラットと、遊ばせなかったラットと比較する研究があります。幼いころに仲間から隔離されたラットは、成長した時仲間のラットと関わるのが難しくなることが判明しています。

荒っぽい遊びをしていたラットはそうでないラットよりも柔軟に、臨機応変に変化に対応できるようです。このように哺乳動物に普遍的とも思えるじゃれ合う遊び方を見ていると、人の育ちにとって大切な育ちの意味があるのではないかと思います。私たち人間には、他の哺乳動物と比較して子ども時代が長く用意されています。変化にとんだ複雑な社会的状況を一瞬で捉え、直感的に対応できる能力を持つことにつながり、頭がよく社交的であるとみなされます。社会的協調性を司るのは「前頭葉の特定の部位」が重要な役割を果たしていると考えられています。

遺伝子的にはチンパンジーなども私たちに似通っていますが、子ども時代はせいぜい3～4年位で、その後、群れから離れ他の群れの中で生活するといわれます。人間の子どもの場合はほぼ全て遊んで過ごしますが、他の動物に

比較して大きな脳を育てるには長い子ども時代が必要なのです。すべての遊びに共通する5つの定義として、

- ・遊びは仕事ではない
- ・遊びはただの無駄な作業ではない
- ・遊びは楽しい
- ・遊びは自然発生的なものだ
- ・遊びは他の基本的欲求、食物や水やぬくもりを求める欲求とは違う

遊びは大人から与えられるものではなく、子どもの内側から湧き出る強い欲求に支えられているわけで、これを保証するのが私たち乳幼児教育・保育に携わる教員、保育者です。

現代はなかなか正規の仕事を見つけるのが難しく、バイトや非正規をつないで生きている成人が多いと報道されます。またそのような人は結婚をあきらめる傾向があり、出生率の減少の大きな原因とされています。小さい頃の遊びに興ずる環境が奪われることは、少子化の根本原因とも言えます。

私たち大人は、相対的に早く字が書けるようになるなど早く発達をしている子どもを見て「すごいね～」などといった言葉をかけてしまいます。人間にとって長い子ども時代の根柢を持たない自己有能感・肯定感はとても重要で、他児と比較される相対的な評価は不要です。この時期をいかに長く生ききるかが、その人の一生を左右する可能性が高いことがわかります。

幼児期は「人生の基盤を育成する最も重要な教育」と定義されるように、すべての子どもの時間・仲間・空間がとても重要でそれを保護する大人の存在が鍵なのです。乳幼児期の育児や教育に携わる人達が、日本の最大の課題に向き合わなければならないのです。

#### 参考、引用文献

「思いどおりになんてそだたない」アリソン・ゴブニック著 森北出版2019

「文化的営みとしての発達」バーバラ・ロゴフ著 新曜社2006



ここがポイント

# 「木育」による幼児の造形とSDGs



京都女子大学発達教育学部 教授／矢野 真

2002年、「持続可能な開発に関する世界首脳会議」でESDが提唱され、その後の2015年には国連サミットにおいて持続可能な開発目標（SDGs）が採択されました。

現在、環境問題が提起されるなか、国土面積に占める森林面積約67%である我が国において、生活における「木」への関心が集まるようになってきました。一方、保育においても幼児や保育者の感性を育み、保護者との対応も含めたコミュニケーション能力の向上のための造形教材を検討する一例として、「木育<sup>(註1)</sup>」による造形活動が少しずつ広がりを見せています。この幼児期からの木による体験としての造形活動、つまり「木育」による造形活動は、SDGsに貢献する一つとしても挙げられます。

筆者が行っている「木育」を用いた造形教材において、環境に配慮したSDGsの次の目標、特に4（質の高い教育をみんなに）、7（エネルギーをみんなに。そしてクリーンに）、11（住み続けられるまちづくりを）、12（つくる責任、つかう責任）、15（陸の豊かさを守ろう）に注目しています。そして、これらSDGsの目標を視野に入れつつ、就学前からの子どもの感性を育み、身近な素材・環境に関わり、コミュニケーション能力を育むための「木育」教材の重要性について、幼児や保育者の方々と共に活動を行ってきました。

保育者を対象とした造形研修会を通じて、保育者側からのご意見に、「木」は身近な存在ではあるが、保育に取り上げる場合、材料・用具の準備や加工の難しさを感じているということでした。しかし、何か具体的なものをつくらなくても、「木」のもつ色や形、匂いや手触りなどを楽しむ活動は可能です。例えば、近隣にある木材会社から出る端材をもらうことができれば、この小さな木片（公園等で調達してきた木の実や枝を使うこともいいと思います）を使って、幼児に身近な「でんぷんのり」を接着剤として使うことにより、造形活動を楽しむことができます。紙やすりがあれば、小さな木片を磨いてツルツルにし、手触りを楽しむこともできます。また、クスノキやヒノキなどの匂いの強い木片があれば、磨く過程で出る匂いを楽しみながら造形活動につなげることも可能です。

このような造形活動を通じて、幼児がSDGsへの興味・関心を持つことにつなげることは大切です。

保育者養成校である筆者のゼミでは、地域連携の一環

として、大学と京都刑務所の連携<sup>(註2)</sup>を通じて木材作業部門と検討を行っています。昨年度は、幼児の造形とSDGsについて、作業部門で出た端材（国産材の桧）を使い、SDGsの項目をデザインしたひねりゴマ（17個1セット）を制作し、近隣の幼稚園・保育園等に寄贈させていただきました（写真1）。



(写真1)

幼児がコマの遊びを通じて、匂いや木の素材や感触、コマ自体への関心を示していること、また、コマを回すことに集中して取り組む様子や、回る様子自体に興味を持つ様子、友だちや保護者と遊びを共有する様子など、コマ遊びがコミュニケーションに繋がっているという有意義な報告をいただいています。

現在は、上述したSDGsの目標に加えて、男女どちらでも好むデザインの設定など、5（ジェンダー平等を実現しよう）につながる「木育」を用いた造形教材について取り組んでいます。

これからも、「木育」による幼児の造形とSDGsを通じて、新たな造形教材につながるよう取り組んでいきたいと考えています。もし、皆様から新たな「木育」教材の発見がありましたら、ぜひご紹介いただけると幸いです。

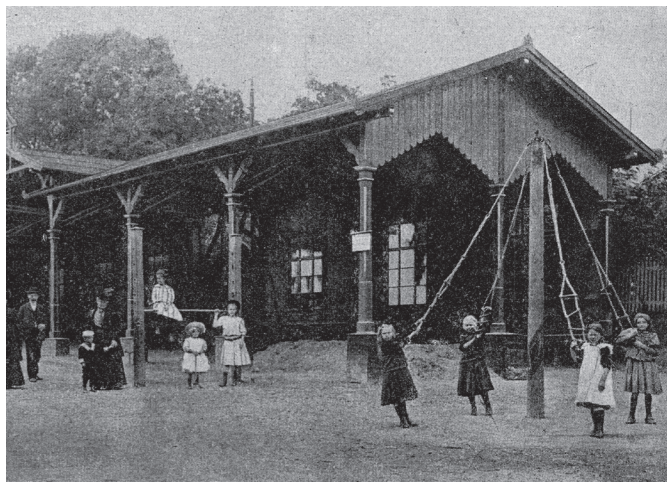
註1：「木育」とは、平成16年に北海道庁が発信した地域プロジェクトであり、木のかかわりを通して、自然の一部として多くの生命と共存しながら生き延びることを実感し未来へつなげる取り組み。

註2：朝日新聞2016年10月6日 29面（京都市内版）



# かけがえのない「子ども時代」を生きる子どもたち

同志社女子大学現代社会学部 教授／笠間 浩幸



ザルトゥフレン 屋根のある砂場

上記の写真<sup>(注1)</sup>は19世紀後半、ドイツにあった幼児教育施設の様子です。右手には「回旋塔」のような遊具があり、中央部分の屋根の下には何やら砂が山のように積まれています。当時子どもたちはここで砂遊びをしていました。

今から30年以上前、3歳の長女が一人で1時間ほど公園の砂場で遊ぶ姿を見た時、私は二つの疑問を持ちました。一つは、砂遊びの一体何が子どもの心をこれほどまでにひきつけるのか。そしてもう一つは、そもそも砂が大量にあるだけの空間は、いつ頃なぜ、子どもたちの定番の遊具として存在するようになったのかというものでした。その後、これらの疑問を解くことが私のライフワークとなったのですが、それはまさに子どもを権利の主体としてとらえることと、社会が子どもの遊びへの理解を深めていった流れを追うことそのものでした。

今日、私たちの多くは、子どもはかけがえのない時間を生きている特別な存在、そして遊びは子どもたちの喜びであり、かつ発育・発達に欠くことのできないものであるということを当然のこととして受け止めるでしょう。でも、このような考えは決していつの時代も、そして誰もが納得するようなことではありませんでした。

古代より洋の東西を問わず、多くの子どもたちが生まれながらにして捨てられたり、命を絶たれたりしました。また産業革命期には、わずか5・6歳の子どもたちが一日中危険な工場の機械の下で働いたり、狭く暗い坑道で石炭掘りをさせられたりすることが普通にありました。幸いに学校に通うことができた一部の子どもたちでさえも、怒鳴り声やムチで叩かれたりするような教育が一般的でした。実に長い間、子どもたちは「小さな大人」、

つまり「未熟で役に立たない大人」として、子ども時代からの一刻も早い脱却を急がされてきたのです。

このような子どもの尊厳を認めない風潮に対して、『エミール』の著者ルソーや孤児たちの学校をつくったペスタロッチらの新しい子ども観や教育観、また「人は生まれながらにして自由で平等な権利を持つ」ことを謳った1789年のフランスの「人権宣言」などの社会的な動きは、徐々に子どもへのまなざしをも変えていきました。

そんな社会変化のなか、1816年、イギリス北部スコットランドの紡績工場に、1歳半ごろから始まる幼児教育施設が開設されました。そこでは、幼い子どもたちが生演奏の音楽に合わせてダンスをしたり、象やライオンなどの動物が描かれた大きな掛図を見て多様な生き物の存在を知ったり、世界地図から遠い異国の地を想像したりしていたのです。また、紡績工場の動力源となるクライド川の清らかな水の流れは、水遊びや水辺の植物や生き物の観察をする上でも絶好の環境でした。子どもたちは生き生きと遊び、活動し、そして学んでいたのです。

この施設の創設者は工場主であったロバート・オーエンという人物でした。彼は、人間はよい環境によってこそ良き人格が育つとして、施設の名も「性格形成学院」と名付け、体罰の禁止と実物教育を徹底しました。さらに彼は、児童労働や長時間労働を禁止する法律の制定にも奔走しましたが、もう一つ特筆すべきこととして、ここに世界初となる教育施設付設の屋外遊び場（園庭）を設置したのです。

このような施設はその後、弟子を通じてイギリス中に広がり、それを見学に来たドイツ人牧師が自分の国にも同様の教育施設を設けました。ただし、イギリスにはなく、ドイツで新たに誕生した園庭遊具、それが写真のような砂場だったのです。もともとドイツには氷河期由来の砂地の土地が多く、また「砂は最良のエデュケーター（教育者）」という言葉もありました。そんな自然的特性と子どもへの洞察眼を背景として、砂場はまさに新しい子ども観・遊び観を象徴する遊び場として誕生したのです。

写真の引用

注1：Dragehjelm, H. (1909) Das Spielen der Kinder im Snade, p.47

# 全国から約680名が参加 4年ぶりの対面開催



開会式



口頭発表



基調講演Ⅰ



ポスター発表

去る令和5年8月18日(金)～19日(土)の2日間、東京の大妻女子大学を会場に、日本全国から約680名の参加者が一堂に集い、第14回幼児教育実践学会が開催されました。コロナ禍によりここ数年間は、オンラインでの開催を余儀なくされていましたが、ようやく4年ぶりに対面での開催となり、台風7号の影響も懸念される中、当日は台風一過の晴天となり、とても暑い2日間となりました。

1日目の基調講演Ⅰは、大妻女子大学家政学部児童学科教授の岡健先生より、『保育における「研究・臨床・教育」をどう考えるか～「臨床」を担う幼児教育実践学会への大いなる期待～』と題して、ご講演をいただきました。幼児教育の世界で「臨床」とは具体的に子ども達と関わっていくことであり、先生たちは子どもとやり取りしていく中で、自分と子どもの関わりをイメージし、なおかつ自分の認識を超えて無意識に体が進んで子どもと関わりを持っている。そして現場の子どもの言葉(子どもとの会話、やりとり)や行動から子どもを読み取ること、そのようなことは養成校では教える事の出来ないものでもあり、とても重要なこと、というお話があり、改めて、現場の先生の子供達への関わりがとても大事なことと再認識させられる内容でした。岡先生はこの基調講演Ⅰだけでなく、2日目の口頭発表Ⅰ、口頭発表Ⅱでも共同研究者としてお話があり、まさにフル回転の2日間でした。

基調講演Ⅱでは、東海大学児童教育学部児童教育学科准教授の寶來生志子先生より、『「スタートカリキュラムから架け橋プログラムを考える」～幼児期の発達や学びからスタートカリキュラムへ～』と題してご講演をいただきました。冒頭では♪ひとりじゃないさ～♪のうたを、会場の参加者も一緒に歌い、まさにコロナ明けでようやく声出しOKのLIVEさながらに講演がはじまり、会場のリラックス感を感じることが出来ました。そして、寶來先生による今までの小学校でのいくつもの実践を動画で紹介いただく中で、その子ども達の姿を見て参加者が周りの参加者と共に「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」に照らし合わせて話し合う場面もあり、そこで

も対面での研修のよさを実感することができました。そして事例をご紹介いただく中で何度も『このお話を近隣の小学校の先生に伝えて下さい』という言葉が言われていたのが印象的でした。

そして、1日目の最後に今年初めての試みの研究者プレゼンテーションが行われました。翌日のポスター発表の事前発表の意味合いもあり、研究者の先生方が短い時間の中でしたが、それぞれに工夫して、研究のテーマ、その内容などを発表していただきました。

2日目の口頭発表では、午前8園、午後9園の発表があり、それぞれの会場に分かれての研修となりましたが、そこではそれぞれの園での取り組みや研究が現場の先生と共同研究者の先生方から発表され、それについての質疑応答を含め、参加者同士で議論し、学びを深めていく様子が見られました。

そして、昼休みを挟んだ約2時間30分のポスター発表では、全国からの45園の先生方と大学研究者の方からの発表があり、そこではそれについて説明する発表者の先生と、熱心にポスターを見ながら声を傾ける参加者で、会場となったアリーナは熱気にあふれていました。

幼児教育実践学会の3つの柱は、

- ①保育現場での実践を踏まえ、発表は事例を用いて、現場にフィードバックできることを念頭に研究会では参加者同士が活発に意見交換を行うこと、
- ②生きた研修のメイキングの仕方を学び、全ての園の園内研修の充実を目指すこと、
- ③保育実践者と研究者が共に育ちあうこと、

とされ、今年は対面での研修による生での議論、そして出会うことの喜びを実感でき、LIVEならではの良さの際立った実践学会となりました。そして、幼児教育の実践を通して、熱い議論が交わされることで、幼児教育の現場の大事さの再確認ができた2日間でもありました。来年度はすでにオンラインでの開催がアナウンスされていますが、今回の開催実績をもとに来年度の計画を検討し、また来年どこかで日本中の皆様とお会いできることを今から楽しみにしています。

# 「保育者としての資質向上研修俯瞰図」の改訂と 「令和6・7年度教育研究課題」について

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 研究研修委員長／岡本 和貴

前号（まなびの広場8月号）では「私立幼稚園・認定こども園の保育者として大切にしたい理念・哲学」と「保育者として身に付けたい資質・能力の道しるべ」についてお知らせいたしましたが、今号では「保育者としての資質向上研修俯瞰図」の改訂と「令和6・7年度教育研究課題」についてお知らせいたします。

## ■「保育者としての資質向上研修俯瞰図」

当機構で平成18年（2006年）に開発し、当機構や各都道府県の私立幼稚園団体において研修会の企画、運営、体系化等に寄与してきている「保育者としての資質向上研修俯瞰図」を今回、新たに改訂いたしました。

従来からの研修俯瞰図は、文部科学省においても、教育・保育の質を高めるためのツールとして、一定の評価を得ており、今回の改訂も文部科学省委託事業として行いました。

「保育者としての資質向上研修俯瞰図」は初版から改訂を重ね、この度は、Vol. 4となります。

今回の改訂にあたり、ワーキングチームでは2つのことを大切にいたしました。

## ●「私立幼稚園・認定こども園の保育者として大切にしたい理念・哲学」と「保育者として身に付けたい資質・能力の道しるべ」との関連

1つ目は、この「まなびの広場」前号においてもお知らせした、「私立幼稚園・認定こども園の保育者として大切にしたい理念・哲学」と「保育者として身に付けたい資質・能力の道しるべ」との関連性です。

それぞれの保育者が学びに向かう心持ちと立ち位置、学びの方向性の指標モデルとしてこれら2つの内容も理解し、研修俯瞰図とあわせて活用していただきたいと思います。

## ●「改訂の内容」

2つ目は、幼児教育現場において研修を体系化するにあたり、時代の変化とともに新たに盛り込む必要がある項目を書き加えたことです。

研修俯瞰図の前回の改訂は平成30年（2018年）に行われておりますが、それ以降、0, 1, 2歳児への理解や学び、食育、スクールバス運行をはじめとした安全管理等、取り上げるべき課題が増えてまいりました。そこで、今回、A分野「愛されて育つ子ども」と、D分野「子ども理解」には新たな中項目を作成し、その他の部分も鉛筆し整理をいたしました。

①前回まで使われてきた、縦軸のA～F分野については、若干のタイトル変更部分もありますが、大きな捉え方としてはそのままとしております。各分野において、1～7のように中項目を分けておりますが、その順序を分野によっては並び替えを行いました。これは各分野の中で研修を進めていく学びの方向性としてお示したのですが、もちろん一方向に限定されるものではありませんので、網羅的に取り組んでいただければと考えております。並びの順序や細かい内容等は前回までとは変わっているところもありますが、今まで研修を受講されてきた履歴については同じ番号で何も変わらず蓄積されていますし、これからも引き継がれていきます。

②研修計画の目安として、項目内容を横軸では従来通り「Hop」「Step」「Jump」の3段階に分けています。新任保育者からベテランの園長にいたるまで、それぞれの経験年数等によって学べる内容が幅広く奥深く多岐にわたることを考えて分類しています。一方、「保育者として身に付けたい資質・能力の道しるべ」では、横軸をキャリアステージとして「フレッシュ、ミドル、ミドルリーダー、リーダー、園長」と

私たちは幼児教育用品を通じ、幼児教育の質の向上に貢献します。

Gakken

ひかりのくに

フレーベル館

世界文化ワンダー販売



JAKUETS



お示ししています。これは年齢や経験等だけで明確に区切られるものではないことから、3段階で線引きするのではなく、グラデーションで表現しており、左右の位置取りも各人において変化するかと思いますが、「研修俯瞰図」の「Hop」「Step」「Jump」とつながっていることをご理解ください。

③「Hop」「Step」「Jump」の3段階をわかりやすく表現するために、キーワードをそれぞれ2つずつあげています。

○「Hop」=（出会う・知る）

教育・保育の基本や初歩的な技能などを知り、向上していくことだけにとどまらず、様々なことに興味を持ち、学び続ける姿勢を大切にしましょう。

○「Step」=（深める・共有する）

自分自身の学びを深めるだけではなく、園全体に視野を広げ、教職員間で共有し、自園の教育・保育の充実に努めましょう。

○「Jump」=（広げる・創り出す）

自園の子どもたち、教職員、環境すべてのことに見通しをもって考え取り組むとともに、自園にとどまらず、家庭・地域・社会全体に発信しつながっていくことが大切です。

④前回までは「Hop」「Step」「Jump」の段階ごとにローマ数字のⅠ、Ⅱ、Ⅲもつけておりましたが、研修スタンプ発行において、そこまで細分化されていないこととあわせて、今回からは表記しないことといたしました。

⑤「研修ハンドブック」も研修俯瞰図の改訂にあわせて今年度中にVol. 4が発行される予定です。初版からお持ちの方は4冊目になりますが、各自の研修を記録し、履歴を残し蓄積することが、教員の資質向上を示すための必須条件となってきていますのでご理解ください。

へとつなぐために～といたしました。

重点課題1～3、課題1～6、特別分野とも、幼児教育の現状と今後の展開を鑑みつつ、改訂された「保育者としての資質向上研修俯瞰図」をもとに設定し、整理いたしました。各地区や各都道府県での教育研究大会等をはじめとした研究や、各園も含めた研修の取組みの手がかりとして適宜取り上げていただき、それぞれの実情にあわせながら、より良い具体化に向けて取り組んでいただけますようお願いいたします。

子どものおかれた環境、園を取り巻く状況、幼児教育体制等が大きく変化している現在において、子どもをまんなかにして、質の高い幼児教育を社会全体で織りなし、未来へとつないでいきましょう。

なお、「保育者としての資質向上研修俯瞰図」と「令和6・7年度教育研究課題」については、令和6年1月26日の全国研究研修担当者会議においてご説明させていただく予定です。

子どもたちの保育・教育にあたるすべての教職員が、必要かつ充分で実りある研修を積み重ねるために、「私立幼稚園・認定こども園の保育者として大切にしたい理念・哲学」「保育者として身に付けたい資質・能力の道しるべ」「保育者としての資質向上研修俯瞰図」「教育研究課題」を併せてご活用ください。そして、一人ひとりの、園全体の、全国の教職員の資質向上が子どもたちの豊かな育ちにつながっていくことを願っています。

【道しるべ】



【研修俯瞰図】



【教育研究課題】



## ■「教育研究課題」（令和6・7年度）

「教育研究課題」は2年ごとに改訂してきておりますが、今回はコロナ禍において様々な活動が停滞していること等を踏まえて小さな改訂に留めておりました。

今回は主題を、『一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を』～社会全体でつむぎ未来



こどもの笑顔に勝る制服はない。

株式会社 矢部スロカッティンフ

URL: <http://www.seagull-yabe.co.jp> E-MAIL: [yabepro@seagull-yabe.co.jp](mailto:yabepro@seagull-yabe.co.jp)

本社	〒241-0821	横浜市旭区二俣川 2-85-2	TEL 045-363-6871	FAX 045-361-3085
東京支店	〒179-0084	東京都練馬区永川 3-21-14		TEL 03-6281-0025
千葉支店	〒276-0026	千葉県八千代市下市場 1-13-8		TEL 047-481-7723
埼玉支店	〒330-0804	埼玉県さいたま市大宮区堀の内町 2-1-1		TEL 048-640-3003
仙台支店	〒981-3131	宮城県仙台市泉区泉中央 1-47-1 アコース泉中央 103		TEL 022-218-3217
大阪支店	〒663-8104	兵庫県西宮市天蓮町 25-15 KIマンション 1F		TEL 079-869-6510
札幌営業所	〒007-0834	札幌市東区北 34 条東 14 丁目 3-1 マンション東豊 1F		TEL 011-712-8088
福岡営業所	〒811-0214	福岡県福岡市東区和白 2-14-28 エクセル和白 103		TEL 092-605-5080
名古屋営業所	〒464-0883	愛知県名古屋市中千種区北千種 2-3-18 1F		TEL 052-778-7272
広島営業所	〒721-0955	広島県福山市新瀬町 3-27-8		TEL 084-953-8818
仙台工場	〒981-0504	宮城県東松島市小松字稔田 110		TEL 0225-82-8111
稚内工場	〒097-0001	北海道稚内市末広 5-35-1		TEL 0162-32-8111
物流センター	〒981-0504	宮城県東松島市小松字稔田 108		TEL 0225-82-8154
第二物流センター	〒721-0955	広島県福山市新瀬町 3-27-8		TEL 084-953-8818



# 機構からのお知らせ

## ゆたかなまナビのオンデマンド研修(第3期)のご案内について

新たに「ゆたかなまナビ」より3コンテンツを追加配信いたしました。詳細は幼稚園ナビに掲載しておりますので、是非ご受講を検討いただきますようお願い申し上げます。また、令和5年8月21日より第2期として4コンテンツを配信しておりますので併せてご確認ください。

### 【講習名／講師】

1. 子どもの育ちと経験の理解  
講師：大橋功（和歌山県信愛大学教授）
2. スタートカリキュラムから架け橋プログラムを考える  
～幼児期の発達や学びからスタートカリキュラムへ～  
講師：竇來生志子（東海大学准教授）
3. 「夢中になって遊ぶ子ども」を育てるためのカリキュラム・マネジメント  
講師：倉岡寿幸（山形県教育庁義務教育課指導主事）  
池田友子（東北文教大学付属幼稚園園長）  
太田智子（東北文教大学付属幼稚園教諭）

- 【申込期間】 令和5年10月2日(月)10:00～令和6年2月25日(日)17:00  
【動画視聴期間】 令和5年10月2日(月)10:00～令和6年2月26日(月)17:00  
【3択5問提出期間】 令和5年10月2日(月)10:00～令和6年2月26日(月)17:00  
【申込方法】 幼稚園ナビより、申込を随時受付中でございます。  
ご不明な点等ございましたら当機構までご連絡下さい。

## 10月20日より当機構のホームページがリニューアルされます！

リニューアル作業を進めていました当機構ホームページを、令和5年10月20日（金）にリリースします。リニューアルは、当機構の広告塔としての役割を目標に掲げ、使い勝手の良さを追求しながら、機構の事業に取り組む各委員会や部会の溢れる熱い思いをできるだけ盛り込みました。デザインを一新した新・当機構ホームページは、皆様の期待に十分に沿えるものと自負しています。ただ、これが100%の完成度と思っていません。来年度も予算を確保しながら、これからもよりよいホームページへ作りこんでいこうと思っています。

1. ホームページ公開日：令和5年10月20日（金）
2. ホームページURL: <https://youchien.com>  
(現行のホームページURLと変更ございません)

調査広報委員長 高尾恵子

**私達は衝撃緩和帽の開発を通じて大切な子供達の未来を守ってゆきます！**

**ゴツツン!! から、  
まもってあげたい。**



企画・開発 **株式会社リード**

〒028-6104

岩手県二戸市米沢字家ノ上3-9-1

<http://hot-anshin.com//index.php>

お問い合わせはこちら

アルファアテンド株式会社

TEL 070-5550-1982

FAX 042-673-2076

[alpha.attend@gmail.com](mailto:alpha.attend@gmail.com)

